

2011 日本放射化学会年会・ 第 55 回放射化学討論会 印象記

村松 久和

Muramatsu Hisakazu

2011 日本放射化学会年会・第 55 回放射化学討論会は、2011 年 9 月 20～22 日までの日程で、長野市若里市民文化ホールを会場として、日本化学会、日本分析化学会、日本原子力学会、日本薬学会の共催を得て開催された。本稿は年会・討論会への参加者の印象記というよりはむしろ、開催準備から運営に携わった側からの記事となることをお断りしておく。

はじめに、この場をお借りして本学会の紹介をさせていただきたい。日本放射化学会 (The Japan Society of Nuclear and Radiochemical Sciences) は、1999 年に設立された学会ながら、その中核となり年会と同時に開催される「放射化学討論会」は、1957 年に東京・学士会館で開かれた第 1 回にはじまり、今回で 55 回目となる、日本の放射化学研究の中心として息の長い伝統ある討論会である。我が国の放射化学研究は、北投石の発見 (1906 年) を端緒にした戦前からの放射化学研究から、戦後一時期の原子力関連の研究全面禁止を経て、広島、長崎への原爆投下にとまなう放射性降下物の分析と 1954 年の第五福竜丸の“ビキニの灰”の分析、その後の研究用原子炉や加速器の整備と歩調を合わせて発展してきている。「核化学・放射化学に関連する基礎および応用研究の発展と教育に寄与し、関連分野の研究者相互の連絡をはかること」を目的とする本会は、多くの学際的な研究領域 (放射線化学、宇宙・地球化学、素粒子・核・原子物理学、保健物理学、加速器科学、環境科学、核医学など) を含む研究者が会員を構成し、放射能及び放射線教育の普及活動

を積極的に支援する活動にも力を入れている。

このような学会の 2011 年会は、電力不足や放射能汚染への懸念から、幾つかの学会や国際会議が関東地方での開催を避けたり、中止・延期を余儀なくされたりする中で、幸い長野市が中部電力管内ということもあり予定通り開催された。ただ、福島第一原子力発電所事故から約半年後、原発事故と放射性物質による環境・食品汚染が国民的関心事になっている中で開かれたため、事故前から構想していた諸企画から、福島原発事故に焦点を当てた企画を中心に据えたものに変更され、一般公開にて開催する「福島原発事故特別シンポジウム」と福島原発事故に関連した「特別セッション」を柱にしたものになった (写真 1)。同時に、キュリー夫人のノーベル化学賞受賞から 100 年目である 2011 年が世界化学年に当たることから、前記 2 つの企画は「2011 世界化学年企画」を冠して実施



写真 1 「2011 世界化学年企画・福島原発事故特別シンポジウム」 会場風景

された。また、原発事故を契機にした原子力発電の是非をめぐる議論の前提とも言うべき放射線・放射能に関する科学的な理解をあまねく国民に広める活動などと関連させながら、“放射線教育”の現状と今後の課題についての発表も特別セッションに含められた。

「2011世界化学年企画・福島原発事故特別シンポジウム」（一般市民に公開；本会では初の試み）では、京都大学原子炉実験所の山名元先生に「福島原発事故の経緯と現状」と題して、東京電力、政府、原子力安全・保安院などから公表されている以上の詳しい経緯と状況について講演していただき、改めて現状の厳しさを認識させられた。続いて、「放射性物質の環境での挙動と飲食物への移行」と題した学習院大学の村松康行先生の講演では、原子炉から環境中に放出され拡散した放射性物質の挙動と移行について、国内における状況に加えて、チェルノブイリ原発事故によるヨーロッパ各地での実例も挙げながら、今後の監視的な研究活動の重要性が話された。3人目の講師として、放射線医学総合研究所の今岡達彦先生には、「放射線の生体への影響～福島原発事故のリスクを理解するために～」と題して講演していただいた。特に低線量域の被ばくとリスクの関係について、どこまでが分かっている、どこから先がよく分かっていないのかが理解でき、参加された一般市民にも明快で分かりやすい講演であったと同時に、会員にとっても今後の教育・啓発活動に生かせる講演であった。ウィークデーという参加しにくい時間であったにもかかわらず、子どもを持つ母親、議会議員、医師、地方公務員、学校教員、食品関連の会社員、ジャーナリスト、大学教員など、100余名の市民の参加があった。

「2011世界化学年企画・特別セッション」は、放射線教育、原発事故関連のモニタリング、学協会横断の連携活動を柱に、それぞれの依頼講演と研究発表（合計24件）から構成された（写真2）。炉心溶融事故による大量の放射性物質の放出と拡散によって深刻な汚染が拡大し、全国の様々な試験・研究機関で放射能測定が進



写真2 「2011世界化学年企画・特別セッション」
報道関係者も交えたポスター発表風景

められている状況下で、数ある学会の中で、本年会・討論会がこの問題に関する科学的なデータと得られる知見を持ち寄り議論する一番適切な場として「特別セッション」を設けたことには大きな意義があった。依頼講演では、「科学としての放射線教育を」と題して、東北放射線科学センターの工藤博司先生が講演され、放射線について間違った情報が流され、国民に混乱が巻き起こっている中で、“科学を知って判断力を養う”との立場から放射線教育のあり方についての提言がなされた。小中・高校から2件の研究発表もあった。「福島県における東電原発事故への対応：緊急時モニタリング」と題して、福島県災害対策本部原子力班の水野哲氏に現場からのリアルな報告をしていただいた。さらに、首都大学東京の海老原充先生から、「福島原子力発電所事故後の学会の対応―連携の重要性」と題して、事故後に素早く動き出した種々のプロジェクトや他学会等との連携活動について報告があった。また、例年同様、各専門領域での研究発表に加え、第1日目の午前中には、信州大学教授・信州大学カーボン科学研究所長の遠藤守信先生による、「ナノカーボンの基礎科学と応用～グリーンイノベーションに向けて～」と題する先端科学の現状について特別講演があった。総じて、国民の関心事に機を失することなく応え、本会の設立趣旨とその存在をアピールした年会・討論会であった。

（信州大学 教育学部）